

内視鏡で耳手術 少ない負担

骨に穴を開けず 痛み軽減

内視鏡を使った耳の手術が増えている。顕微鏡を使ったこれまでの手術より体への負担や痛みが少なく、手術をためらっていた人も受けるようになった。最近では、穴が開いた鼓膜を再生する新手法にも内視鏡が使われている。

高齢者も治療前向きに

山形市の会社員男性(49)は7年前、右耳の鼓膜の内側に真珠腫という塊ができ、耳の穴がふさがって聞こえが悪くなった。放っておくと炎症がひどくなり、周囲の骨を溶かすこともある。山形大学病院(山形市)の欠畑誠治教授を受診し、手術で取り除くよう勧められた。

手術は内視鏡で行われた。直径3ミリの弱の内視鏡と器具を耳の穴に入れ、鼓膜を佐詰のふたを開けるように一部を残

して周囲を切開して持ち上げた。真珠腫を取り除き、鼓膜を縫い付けた。男性は2008年にも左耳の真珠腫を取り除く手術を受けた。その時は耳の後ろの骨に穴を開け、顕微鏡で見ながら取り除いた。内視鏡の方が術後の痛みは少なく、耳を包帯でぐるぐる巻きにせず綿球を詰めるだけで済んだ。傷痕も残らず、術後3日目にシャワーを浴びることができた。男性は「内視鏡では手術前

に髪をそらないのがうれしかった。負担は顕微鏡手術とは比べものにならないくらい軽かった」と話す。

欠畑さんによると、耳の内視鏡手術は1984年にフランスで始まり、2000年代に広まった。国内では、03年に欠畑さんらが始めた。現在は真珠腫のほか中耳の炎症が続いて鼓膜に穴が開く慢性中耳炎、耳の組織が硬くなる耳硬化症など、耳のほとんどの病気の手術に使われている。

鼓膜のすぐ下には味覚の神経が通っており、手術で傷つけるリスクがある。米国の医師らが283例の手術を分析し、内視鏡の方が顕微鏡より神経を傷つけるリスクが低かったとする論文を今年9月に発表した。また、鼓膜の内側は大鼓膜のように閉じた空

間になっており、周囲の皮膚でガスを出し入れして気圧を一定に保つ。内視鏡は大事な組織を切り込まずに済み、良い状態を保てる。こうしたことから、内視鏡手術をする医療機関が増えてきている。日本耳科学会の16年の調査では、耳の手術を多く扱う全国の医療機関の3割ほどでしか行われていなかったが、18年には7割に増えた。

慶応大病院(東京都新宿区)の神崎晶講師は「これまで高齢者は耳の病気になるても『痛そうなので片耳だけ聞ければいい』といった理由で手術をためらう人が多かった」と話す。だが、聴力が低下すると認知症の症状が進みかねない。内視鏡手術を導入したことで体への負担が減り、手術を受ける患者が増えたという。

鼓膜再生 最新的手法にも活用

最近新しい手法による鼓膜再生術にも内視鏡が使われている。従来のやり方より元の状態に近い鼓膜になり、聴力も格段に回復するという。11月から公的医療保険が適用されるようになった。

眞一医師らが開発した方法は、ゼラチンでできたスポンジに鼓膜の再生を促す薬をしみこませて塞ぐ方法だ。内視鏡で見ながらスポンジを鼓膜の穴につめ、医療用のので固める。スポンジのなかで鼓膜の細胞が成長し、3週間ほどで元に戻る。聴力は特に人の声の周波数を聞き取る力が回復するという。

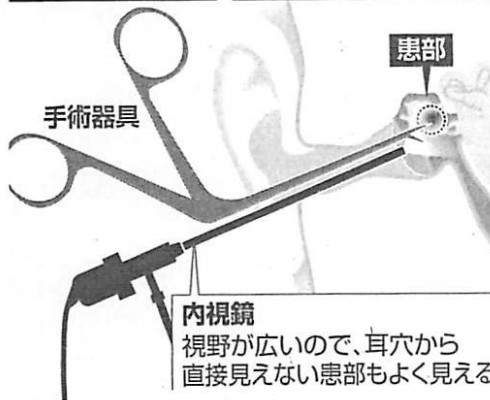
鼓膜は再生能力が高く、自然に塞がることもある。だが、塞がらない場合は、これまで耳の後ろを切開してとり出した筋肉の一部を小片にして貼っていた。小片を足場に組織の再生を促していた。ただ、耳の外に傷痕が残る、厚い小片が残って聴力が十分に回復できなかった。また鼓膜の薄い部分が鼻をかむと破れることもあった。

現在この治療を行う医療機関は北野病院や慶応大病院など全国4病院のみで、耳に他の疾患があると公的医療保険が適用できないなど課題もある。金丸医師は「全国で治療が受けられるように広めていきたい」と話している。

耳の内視鏡手術



内視鏡手術の様子



内視鏡 視野が広いので、耳穴から直接見えない患部もよく見える

顕微鏡

- 歴史が長い
- どんな部位にも対応
- 耳の後ろを切り開くことがある

内視鏡

- 手術後の痛みが少ない
- 組織を無駄に切らない
- 可能な医療機関が限られる

北野病院(大阪市)の金丸